

## プルタルコスにおける動物の徳倫理

徳理論における「プロアイレシス」の概念

中村 健 (大阪体育大学)

ローマ帝政期のギリシア人哲学者プルタルコスは、動物擁護論を展開したいくつかの著作で知られているが、中でも『陸棲動物と水棲動物ではどちらがより賢いか』(『モラリア 12』所収)においては、様々な動物や魚たちが知性や徳性を発揮する逸話を紹介し、人間以外の動物がある程度の理性のみならず、徳性をも有していることを論じている。これによって、プルタルコスは、動物は理性を持たないがゆえ彼らを道徳的に配慮する必要はないとするストア派に抗して、場合に応じて動物に配慮すべきだと主張するのである。

このようにプルタルコスは、動物たちが「ある程度は」理性を有することを論じている一方で、当然ながら彼らの理性や知性が完全ではないことをも積極的に認めている。つまり、彼は動物の理性が限られたものであることを認めており、それにもかかわらず、動物に徳性を帰しているのである。だが他方では、よく知られているように、プラトンやアリストテレスにおいては、また、プルタルコスの主要な論敵であるストア派においては、徳性を獲得するためのハードルは極めて高く、時として人間にとっても徳性を身に着けることは不可能ではないかと思われるほどである。

それでは、なぜプルタルコスは、限られた理性しか持たない動物に徳性を帰すことができたのか？ それはいかなる徳理論に基づいているのか？ 本発表の目的は、これらの問いに何らかの答えを与えることである。

より具体的には、プルタルコスが動物たちの理性の不完全性を認めながらも、それでも彼らの内にある程度の徳性を見出すことができたのは、彼がアリストテレスや、彼とほぼ同時代のストア派のエピクテトスとは異なり、徳の要件に「プロアイレシス」の能力を含めていなかったからではないか、という仮説を立て、彼の『倫理的徳について』などの著作に基づいてこれを検証する。

まず、この語を専門用語として初めて確立したアリストテレスにおける用例を概観する。多くの論者が指摘しているように、この語は、アリストテレスによってはじめて、行為(やその帰結)に対する道徳的責任をめぐる論争において重要な役割を果たす専門用語として導入され、後代の論争においてもそのような文脈で用いられた。現代の諸学者たちは、この語を「選択」、「意図」、「意志」、「目的」など様々に訳してきたが、Chamberlain は、実際にはアリストテレスによる用例は、これらの活動をすべて含んだプロセス全体であると解釈している<sup>[1]</sup>。例えば、禁煙するという「目的」を「意図」し、そのための手段を「選択」するのだが、タバコを吸いたいという欲求があるので、「意志」によってそれを抑え、そのような欲求を変化させるという一連のプロセスの全体がプロアイレシスなのだとは彼は論じる。その上で、彼は、アリストテレスの「プロアイレシス」を「コミットメント」と訳するのである。このような解釈が正しいのだとすると、アリストテレスにおいて、プロアイレシスとは、単にある目的を達成するための手段の単発的な選択行為であるというよりも、(a) 長期的な展望の下で理想の実現を目指す持続的なプロセスであるように思われる。

また他方で、アリストテレスは『ニコマコス倫理学』における「性格の徳」の定義において、徳とは、中庸に狙いを定めた「選択に関わる性向」として語り、ここから、彼にとって、(b) 「プロアイレシス」は徳(性格の徳)の必要条件であることが分かる。

次に、エピクテトスにおける「プロアイレシス」の用例を概観する。彼は、ストア派の中でははじめてこの語をその議論に大々的に導入したと多くの学者たちによって理解されている。Dobbinによれば、エピクテトスは、運動の原理をプロアイレシス、ピュシス、アナンケー、テューケーなどのアルケーに分類する、アリストテレスに由来するとされる伝統を引き継ぎ、これを独自に発展させたのだという<sup>[2]</sup>。すなわち、ストア派は当時、決定論と自由意志をめぐる、アカデメシア派や新アリストテレス主義者たちとの論争において批判にさらされていた。つまり、ストア派は彼らの決定論のゆえに、プロアイレシスの余地をまったく残していないと攻撃されていたのであり、そのような状況の中で、エピクテトスは決定論と出来るだけ整合させる形でプロアイレシスを自らの哲学に導入したのである、と。

エピクテトスはこのようにプロアイレシスの概念を独自の文脈で発展させたとはいえ、彼のプロアイレシスも、上記の (a) と (b) のいずれをも満たしているように思われる。特に、彼は「善はプロアイレシスの内のみ存する」と語り、これは当然ながら、徳(アレー)のみが善きものであり、それ以外のものはすべて善悪無記であるとするストア派の教説を思い起こさせる。したがって、エピクテトスにおいては、プロアイレシスは「徳」の必要条件であるどころか、ある意味では「徳」とほぼ同義的に用いられている。

最後に、プルタルコスにおける「プロアイレシス」の用例を検討する。彼においても、この概念は長期的な展望の下で理想実現を目指す持続的なプロセスを含意しており、(a) を満たしているように思われる。例えば、彼は、『政治家になるための教訓集』798C において「まず第一に政治活動の基盤には、堅固で強い土台のように、判断力と分別に根拠を据えた選択(プロアイレシス)というものがなければならない」と語っているし、これと調和するように、『英雄伝』の様々な箇所においても彼は、長期的に一貫した政策を保持し続けることを政治家の重要な資質として論じているからである。しかし他方において、プルタルコスは、徳を規定する際には「プロアイレシス」の概念を用いていないように思われる。実際のところ、『倫理的徳について』においては、アリストテレスからの影響が明らかであるにもかかわらず、彼は、徳を単に「感情の中庸」と定義しているのである。

さて、アリストテレスやエピクテトスのみならず、プルタルコスも、動物が (a) の意味でのプロアイレシスの能力を欠いていることは認めていたと思われる。それゆえ、アリストテレスやエピクテトスは、動物が徳を獲得できるとは、当然ながら、考えなかった。それに対して、プルタルコスは、徳の要件にプロアイレシスの能力を加えていなかったために、動物たちが彼らなりの仕方では何らかの徳を発揮しようと語ることができたのではないか。本発表では、この仮説の検証を行う。

[1] Chamberlain, C. "The Meaning of *Prohairesis* in Aristotle's Ethics," *Transactions of the American Philological Association* 114 (1984), 147-157.

[2] Dobbin, R. "Προαίρεσις in Epictetus," *Ancient Philosophy* 11 (1991), 111-135.